

2025 年度卒業時アンケート 自由記述データ分析レポート

～ 学生の満足度の分岐点 ～

教学 IR 委員会

2025 年度卒業時アンケートの自由記述回答を対象に、単語の出現傾向（TF-IDF による特徴語抽出）および単語間の結びつき（共起頻度）を計量テキスト分析しました。

分析の結果、本学の最大の強みは「教員（先生）のサポートと、それに伴う成長実感」にあることがデータから強く裏付けられました。一方で、満足度をさらに一段階引き上げるための課題も浮き彫りになっています。

結果ダイジェストと解釈

回答者の満足度（とても満足／ある程度満足／あまり満足していない）ごとに、自由記述内で「特有に多く使われている単語（TF-IDF スコア上位）」を抽出しました。

満足度	特徴的な頻出ワード(上位)	傾向(何について記述しているか)
とても満足	1. 先生 (79.5) 2. 生活 (45.7) 3. 友人 (38.9) 4. 楽しい (38.6) 5. 成長 (23.0)	教員との結びつき・成長・生活全体の充実
ある程度満足	1. ない (28.3) 2. 満足 (23.7) 3. 卒業 (15.2) 4. 取得 (13.5) 5. 人 (10.3)	「不満はない」という現状肯定・タスクの完了
あまり満足していない	1. 少ない (3.8) 2. 内容 (2.5) 3. 科目 (1.2)	カリキュラムや選択肢へのミスマッチ・不足感

Note: カッコ内は TF-IDF スコア。数値が高いほど、その満足度層を象徴する強いキーワードであることを示します

① 成果：「教員」は最高評価を生み出すコア価値

「とても満足」層の記述において、『先生』という単語が圧倒的なトップ（スコア 79.5）となっています。さらに、単語同士の結びつき（共起頻度）を見ると、『先生』という単語は『楽しい（1566回）』『生活（1401回）』『成長（1249回）』といったポジティブな単語と極めて強く結びついています。また、『充実－先生』『やすい（相談しやすい等）－先生』の共起も目立ちます。

これは、「教員への相談のしやすさや手厚いサポートが、学生の大学生活全体の充実感や自己成長に直結している」という事実の表れです。日々の先生方の学生への寄り添いが、最高評価を生み出す最大の源泉となっていることが示されました。

② 課題：「ある程度満足」層を隔てる壁

トップ評価である「とても満足」層と、次点である「ある程度満足」層の間には、明確な「満足の質」の違いが存在するようです。「ある程度満足」層の特徴語を見ると、『卒業』『取得（資格など）』が上位にきている一方、「とても満足」層で圧倒的だった『先生』や『成長』といったワードが影を潜めています。また、トップの特徴語が『ない』であることも見逃せません。これは「特に不満はない」といった消極的な評価を含んでいると推察されます。

すなわち、この層の学生は「無事に卒業でき、資格も取得できたので（不満はないから）ある程度満足している」という、タスク消的な平静な状態に留まっています。大学のコア価値である「教員との深い関わりを通じた成長」にまで手が届いておらず、ここで評価の隔たりが生じています。

③ 「あまり満足していない」層の傾向

マイナス評価の層は『少ない』『内容』『科目』が特徴語となっており、教員の対応への不満というよりも、提供される授業内容や選択肢の数など、カリキュラムや環境面での期待値とのズレが不満の要因となっていることが窺えます。

今後の展望（示唆）

今回のデータは、「大阪樟蔭女子大学の教員のサポートは、学生を最高レベルの満足へと導く」ということを明確に示しています。今後の学校全体の満足度底上げに向けた鍵は、「ある程度満足（＝不満はない・卒業/取得重視）」に留まっている層に対し、いかにして本学のコア価値である『先生』との接点を増やしていくかにあるのかもしれません。

【付記】 分析手法（データ前処理および算出条件について）

本分析は、テキストマイニング手法を用いて以下の手順・条件で実施しました。

1. 形態素解析とベースデータの作成

卒業時アンケートの自由記述データ（テキストデータ）に対し、形態素解析エンジン「MeCab」（辞書：IPA 辞書）を用いて形態素解析（単語への分割・品詞判定）を実施しました。

2. データクレンジング（表記揺れの統一と不要語の除外）

分析の精度を高めるため、抽出された単語群に対して以下の前処理（クレンジング）を行っています。

- 同義語の統合: 出現頻度の高い代表語に合わせて単語の統合を行いました（「教員」を「先生」に統合、「友達」を「友人」に統合）。
- ストップワード（不要語）の除外: 単語の出現頻度を集計後、テキストの文脈を判断する上でノイズとなる一般的な機能語（「こと」「ため」「事」「等」）を除外しました。また、卒業アンケートというドメイン（領域）において一律に頻出する汎用的な単語（「4」「4」「年間」「自分」「自身」「よい」「いい」）についても、特徴を捉えにくくする要因となるため分析対象外としています。

3. カットオフ値（最小出現頻度）の設定

上記の前処理を経た単語群のうち、「出現頻度 3 回以上」の単語のみを分析対象として抽出するカットオフ処理を行いました。これは、出現頻度 3 回以上の単語群によって全体の総出現頻度の約 80%を網羅できることが確認されたため、これを統計的に有意な語を捉えるための閾値として設定したものです。

4. スコアの算出

整理されたデータセットに基づき、特徴語の抽出（満足度層ごとに TF-IDF スコアの算出）、対応分析、および単語間の結びつきの強さを測る共起頻度の算出を行いました。